

10代の社会学的研究に向けて

— 「10代の社会化」「ライフコースとしての10代」という視点—

工藤保則

10代については、これまでそのどこかに焦点をあてた研究はされてきたが、10代という10年間を単位として社会的に研究されることはほとんどなかった。しかし、10代という時期は、時間的連続性の中でまとまった状態として、社会的にもあらためて考える価値のある10年間だと考えられる。本稿は、その問題意識のもと、筆者がこれから行おうとしている、「都市と地方」の「10代」を比較しながら、それぞれの「地域性」とかかわる、かれらの「社会化」「ライフコース」についての研究の序説となるものである。

キーワード：10代、社会化、ライフコース

1. はじめに

本稿は、筆者がこれから行おうとしている、「都市と地方」の「10代」を比較しながら、それぞれの「地域性」とかかわる、かれらの「社会化」「ライフコース」についての研究の序説となるものである。

人生を10年単位でくくって考察することには、生物学的・生理学的にはそれほど意味はないだろう。だが、10代、20代、30代・・・という10年間の連続する時間には、やはり何かしらの意味があるように思われる。

筆者は、別稿で、女子大学生のショート・ライフヒストリー・インタビューをまとめている（工藤2005）¹⁾。彼女らはインタビュー当時21歳（大学3年生と4年生の間の春休みにインタビューを実施）であり、ひとつのタイプは、地方出身で都市の大学に進学した学生であり、もうひとつのタイプは、都市出身で都市の大学に進学した学生である。

2つのタイプの学生が語る10代は違っている。それは「個人」としての経験の違いからくることも、当然ある。しかし、その奥に、高校卒業まで過ごした「都市」と「地方」という環境の違いもあるように感じられる。これらから、極端にいつてしまえば、都市と地方の10代は違うと考えられるのである。

ところで、3節でふれることになるが、フリーター、ニート、パラサイトシングル等の最近耳にする事の多い話題は、成人後の10数年、つまり20～35歳くらいの時期における社会と個人の関係についてのことに由来する。だが、インタビューで示した学生を含め私たちは、急に20～35歳になるわけではない。必ずその前段階が存在し、そこでは話題とされるような社会の状況が、他者からのまなざしとしてそそがれる。それが10代という時期であろう。

そういう10代は、そのどこかに焦点をあてた研究はされてきたが、10代という単位として社会的に研究されることは、これまでほとんどなかった。けれども、10代という時期は、時間的

連続性の中でまとまって、社会的にもあらためて考える価値のある10年間だと考えられる。

以下、本稿では、最初に掲げた、筆者がこれから取り組もうとする「10代研究」に備えて、上で述べたことをもう少しわしく見ていく。2節では、10代に関わって、これまでどういう研究がされてきたのかを見る。続く3節では、その10代がいきる、またかれらにとって将来像を描く元になる現代社会の様相はどういうふうなのかを多方面から見ていく。それらをうけて4節では、筆者の「10代研究」において、求められる視点、取り組むべき課題、について具体的に明らかにする。

2. 10代に関わる諸研究

1) 発達心理学的研究

10代といった時、まず最初にかれらは「社会問題」的な関心を集める。それは以前は少年(少女)非行としての注目だったのだが、現在では、以前の意味におけるような非行少年・少女は消滅したといわれている²⁾。非行少年・少女にかわって80年代後半から注目を浴びるようになったのは、普段は目立たないのだが突然キレる少年であり、ブルセラ・テレクラ・援助交際をする少女である。また、神戸連続児童殺傷事件(1997年)、西鉄バスジャック事件(2000年)、歌舞伎町ビデオ店爆破事件(2000年)、長崎幼児誘拐殺人事件(2003年)、佐世保女児殺害事件(2004年)、寝屋川小学校殺人事件(2005年)、という非行というには大きすぎる、悲惨な事件の加害者としての10代である。

大小の犯罪、事件を起こす存在としてではない10代も、当然、存在する。それは、ふつうの10代といえるかもしれないが、かれらは香山リカや大平健らがえがくように「自分」や「こころ」に執拗にこだわるのが特徴といえよう(香山2000, 2004, 大平1997)。それは、今までの思春期—これも、後で見ると、連続性でとらえられる発達概念のひとつといえよう—的な悩みとはやや様相が違うように感じられる。

当然のことながら、事件というものが個別具体的なもののためか、自分やこころというものが個別抽象的なもののためか、かれらの存在が10代という時間的連続性の中で意識され、そして位置づけられることは少ない。時間的連続性ということが意識されるのは、心理学、なかでも発達心理学においてである。ここで、発達心理学において示される「発達」の段階を簡単に見ておくことにする。

① 生物学的・生理学的な発達

ライフコース研究の先駆者のひとりとして位置づけられるC. ビューラーは、次の5つの主要な生物学的発達段階を設定した(Buhler 1968)。

- 一. 再生産能力なき漸進的成長期(0～15歳)
- 二. 再生産能力をともなう漸進的成長期(おおよそ15～22歳)
- 三. 成長なき再生産能力期(22～45歳)
- 四. 女性の再生産能力喪失をともなう衰退開始期(45～65・70歳)
- 五. 男女の再生産能力喪失をともなう衰退期(65～70歳)

これらは、年齢によって区切られたおおまかな区分といえるが、人はだれでもこの段階を通過する。そういう意味では、この分類は、ある程度承認された年齢区分になっているといえるだろう。そこでは10代は「再生産能力なき漸進的成長期」と「再生産能力をともなう漸進的成長期」の中に位置する。

② 認知能力の発達

子どもが生活世界を知るようになるプロセスを理論化したのが J.ピアジェである。彼は認知能力の発達には次の4つの段階があることを主張した (J. Piaget 1970)。

- 一. 感覚運動段階……最初の18ヶ月。シンボルをほとんど使用せずに映像が調整され、経験が組織づけられる
- 二. 前操作段階……6歳までの期間。何らのシンボルを使うが、反対の可能性を調べながら、いろいろ推理する能力はまだ備わっていない
- 三. 具体的操作段階…6～12歳。論理的な原理は習得されても、まだ、具体的な日常的出来事にしぼられている
- 四. 形式的操作段階…抽象的思考や関係が喚起され、それについての仮説がたてられる

各段階は前の段階の到達に依拠している。また、形式的操作段階以上の段階が示されないのは、認知的成長が止まってしまったためではなく、能力が十分に達成されてしまったからである。ピアジェの4段階によれば、10代は「具体的操作期」「形式的操作期」の中に位置する。

③ ライフサイクル理論

E.エリクソンは精神分析的な視野に立ち、また人類学的なフィールドワークを行うことから次のような「人生の8段階」説をとらえた (E. Erikson 1950)。

表1 エリクソンの人生の8段階

年齢レベル	課題解決
乳児期	基本的信頼対不信
幼児期	自律性対羞恥・疑惑
児童前期 (遊技期)	自発性対罪意識
児童後期 (学童期)	勤勉対劣等感
青年期	アイデンティティ対役割の混乱
成人前期	親密対孤独
成人後期	生産性対停滞性
老人期	統合対絶望

出典: Erick Erikson, Childhood and Society. (仁科弥生訳『幼児期と社会』1・2)

エリクソンは、各段階には、正常の発達を促すために成し遂げなければならない課題があるという。そして、逆に、各段階はパーソナリティをいっそう分化させ、そこで新たに達成されたことは体験に組み込まれ、後の課題をまっとうするために利用されるという。そのことを順序よくこなしていくことで、一生を通じて自我が発達していくというライフサイクルモデルを提唱した。エリクソンの8段階説では、10代は「児童後期 (学童期)」「青年期」にあたる。

③ (心理学的) ライフコース論

J. レビンソンのライフコース論は、年齢の役割を重視する生涯発達に強い影響をうけた成人期の発達モデルである。これは男性の生活構造の年齢ごとの発達であり、移行期と安定期を繰り返しながら、人生段階を移動していく、という図式になっている (Levinson 1978)。その中で、10代は、彼のライフコース・モデルで示される発達モデルの前段階となることから、ほとんどふれられることはない。

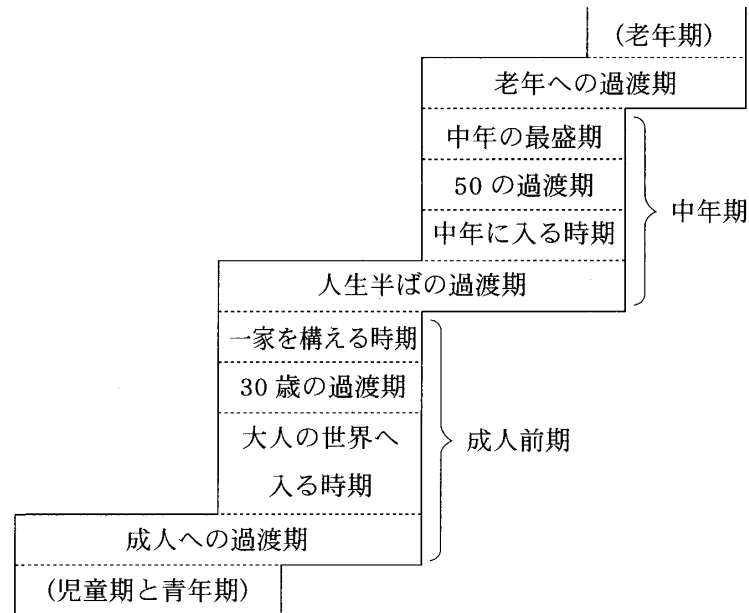


図1 人間のライフサイクル

出典 Daniel J. Levinson, *The Seasons of a Man's Life* (南博訳『人生の四季』)

ここまであげてきた発達心理学的研究は、どれも時間的連続性の中で人生をとらえるが、そのことがかえって〇〇段階(期)、〇〇段階(期)と人生を分断し、そしてそれぞれを固定してしまう側面もある。それぞれの「段階」における危機や課題が達成されれば次の「段階」に移行すると、ある意味、それぞれで完結してしまうのである。

その中で10代は、ある「段階」と次の「段階」のまたがる時期、つまり危機・課題が含まれる複数の「段階」が存在する期間であり、時間的連続性の中で、階段をひとつ登るかのような期間としての興味が持たれる。しかし、そこには、社会学的な視点、つまり社会の中で個人が属する環境・文化によって影響をうけるという視点は、それ程、入ってこない。

社会学では、人の成長は、発達心理学のように、〇〇段階(期)、〇〇段階(期)と固定して考えることよりも、役割順序と役割移行の方を優先してとらえる。期間・時間的な枠組みの中で人生をとらえることはこれまではあまりされてこなかったといえるだろう。が、社会学的に、10代という10年間を時間的連続性の中でとらえることはできないのだろうか。その可能性を筆者のこれから行う「10代研究」で試論的に検討したいと考える。

2) 社会学的研究

社会学においても、10代をまとめてとまではいかなくとも、10代というもののどこかに焦点をあてた研究はある。その中で、特に、若者論的なアプローチと教育社会学的なアプローチを以下に示すことにする。

① 若者論的なアプローチ

10代後半から20代前半を主な対象とした若者論という領域があるが、それが対象とする現代の若者の特徴を、宮台真司は「仲間以外は皆風景」という言葉を使って説明する³⁾。それは、若者の目には「仲間以外」の人はうつらず、かれらにとってそれは、あたかも「風景」であるかのような存在であることをいっている。そしてそれと同時に「仲間」である友人との関係も、以前

のものとは違ってきていることを暗に示している。

そのことを、若者風俗として特徴的なツールであるケータイから見ると、ケータイメディアは人と人との間をダイレクトに、そして瞬時につなぐことが可能であるため、そこには強い親密性がうまれる。親密性というのはおうおうにして同質性を高めることから、今の若者はかなり同質性の高い友人関係の中にいると考えられている。本来、他者というのは異質な存在である。異質だからこそ、私たちはそれとの関係において自己というものを確立、認識してきた。若者において仲間以外の関係は変容しており、また、もともとある程度同質性にもとづく関係であった仲間関係も、現在ではより同質性が高いものになっている。と考えると、現代の若者は、自分とよく似た人ばかりの中で過ごしているということになる。

そういうかれらは、同時に「みんなぼっち」ともいえるような状態にもあるようである。気心が知れた「仲間」と一緒にいたとしても、お互いのコミュニケーションは希薄であり、みんなの中で「自分らしく」ふるまおうとするのである。その状態のことを藤村正之は「みんなぼっち」と呼び、若者のコミュニケーション状況を象徴的にとらえている（藤村 1999）。

若者論でいわれていることと同様なことを、(若者の)逸脱行動研究から土井隆義もいっている。土井(2004)は現代の若者の姿を、親密圏にいる人間に対しては、関係の重さに疲弊するほど高度に気を遣って、お互いに「装った自分の表現」をしあっているけれども、そのことによりエネルギーのすべてを使い果たして、公共圏にいる人間に対しては、匿名的な関係さえ成立しないほどにまったく無関心で、一方的に「素の自分の表出」をしているだけ、という。

それともかかわっているが、土井(2003)は、現代の少年犯罪の特徴を、現代社会の文化のあり方のなかに探り、それを文化的なタイプとして描き出しているのだが、その考察を通して、先にも述べたように「非行少年」の概念がもはや成立しえなくなっていることを示す。特にその第二部では、現代日本の若者の多くに共有されているメンタリティが描き出され、その背景を考察している。

その共有されるメンタリティとは、「個性的であること」というものである。「個性的であること」は社会規範のひとつとなっており、それはもはや社会化の産物であると土井はいう。そして、彼らの感受する個性とは「社会的な人間関係の中で切磋琢磨しながら構築されていくものではなく、自分の内面へと奥深く分け入っていくことで発見されるもの」「人間関係の函数ではなく、固有の実在」であることを示している。

そのような現代の若者達にとって、周囲の環境に合わせて演技的な態度をとることは、自分をストレートに表出していないという意味において、自己欺瞞にほかならないと感ぜられる。こうして、彼らは、他者に対する関心を失って、自己の内的世界へと深く耽溺していくことになる、というのである。

宮台、藤村、土井らがいうのは、前述した香山や大平の指摘する「自分」「こころ」に執着する若者の姿と一致する。そして、それは、森真一がいう「心理主義化」社会のあらわれ方のひとつのかたちであろう⁴⁾。社会自体が心理主義化しているといえるのだろうが、中でもその傾向は、特に若者、そして10代に強いように思われる。

心理主義化社会におけるこれらの現象は、つまるところ、他者との関係性が希薄になっていることをいっている。それは関係性の変容ともいうことができるだろう。そこで、筆者が行う「10代研究」では、関係性の変容する中で、現代の10代が実際に持つ関係はどのようになっているのかを具体的にとらえたいと考える。

その関係性が変容しているとはいえ、学校の中では、やはり、先生に対しては生徒、友だちに対しては友だち、そして家庭の中では、やはり、親に対しては子ども、きょうだいに対してはきょうだい、であることにはかわりはない。変容のおこっている中で、これら具体的な他者との相互作用の果たす役割・意味をあらためて考えてみたいと思う。

② 教育社会学的アプローチ

10代というのは、小学校高学年、中学校、高校、さらに進学したものにとっては大学、の時間でもある。ということは、教育社会学的な「対象」となる存在である。けれども、小中学生を対象とした社会学的な研究はこれまであまりされてこなかった。また、研究がされる場合も、それぞれの研究として終わることが多く、まとまった成果として発表されることはあまりなかった。一方、高校生を対象とした研究は、高校がその後の進学、就職の分岐点となることがあるためか、小中学生研究ほど少なくはなく、最近の代表的なものとしては、樋田他編（2000）、尾嶋編（2001）をあげることができるだろう。それはどちらも学校階層、社会階層など構造的な視点からの研究であり、ふたつの研究はゆるやかに関係しあっていると考えることもできる。ここで、そのふたつの研究を簡単に見ておくことにする。

樋田他編（2000）は、1979年に調査を行った東北地方A県と中部地方B県の高校に対し、再度97年に調査を行うことで、約20年の間の高等教育の変動を論じたものである。

79年調査では、「高校教育の普遍化にともなって完成した高校生文化と進路形成の秩序」、すなわち、学校ランクに応じて生徒文化が形成され、また生徒の進路選択が枠づけられる、いわゆる「トラッキング」のメカニズムを明らかにすることに成功している。

97年調査では、20年間の高校教育と制度的環境の変化にともなって「トラッキングの弛緩」ともいべき高校教育の構造変動がおこっているのではないかと、という仮説をたて、データ分析を行っている。分析の結果、学校による生徒指導や進路指導は全体としてみれば学校階層間の差異が小さくなる方向へと変化しているが、一方で、学校階層上層部分ではむしろ格差規範が強化されていることが明らかになった。また、生徒の行動様式、意識にも同様の変化が見られ、先のものとの合わせ、単純なトラッキング弛緩仮説はあてはまらなかった。そしてなにより、分析を通して、樋田らは、トラッキングの弛緩以上に重要だと思われる、高校と高校生「全体」の変化の大きさをを実感するようになっていく。その「全体」の変化とは、社会階層の影響力がより顕在化してきたことである。つまり、高校生の進路分化において社会階層的要素、とりわけ家計水準が影響力を増している可能性が示唆されたのである。そのことから、階層的秩序の再構造化を惹起する、新たなトラッキングメカニズムの出現（新たなトラッキング・メカニズムの出現と階層的秩序の再構造化）を主張するに至っている。

尾嶋編（2001）も、1981年に神戸市・阪神間の高校を対象に行った調査の、1997年再調査であり、学校を中心としながら時代の変化を読みとろうとした時点間比較研究である。

2時点間のデータを比較分析した結果、生徒の職業希望の変容、学校生活・職業生活に関する態度変容、など時代変化との関連で興味深い知見が得られている。中でも特に、16年の間、全体的に脱学校感や脱近代的職業観を高めながら、生徒個人としても自己実現的な職業志向を強めることで、学校タイプ間の差異は小さくなる傾向にあったことが示されたことや、学校における生徒の下位文化が、そこに属する生徒たちを一定の方向にむかって社会化するという傾向は弱まっていることも示されたことなどは、注目すべき知見であろう。そして、これらから、「学校の相対的なウェイトの低下」、「生活構造の多チャンネル化」、「学校的手段の利用」等という、現在の

高校生に対する学校の囲い込み効果が低下している実態を明らかにしている。

樋田他編（2000）も尾嶋編（2001）も、どちらも、時点比較であり、構造的な視点からの考察が主である。また、高校の役割の変化をとらえた点でその成果も似ている（ところがある）。違いといえば、その対象地域であり、樋田は地方を、尾嶋は都市部を対象としている。

地域性についての研究といえば、最近は郊外についてのものが多く⁵⁾、地方についての研究はそれほど行われていない。けれども、地方的なもの、そして都市的なもの解明は社会学における古くて新しいテーマである。筆者の行う「10代研究」では、それぞれの10代—研究の対象としてはあつかわれることの少なかった小学生・中学生と、高校生・大学生を同時に意識して—の有り様を見ることで、都市的なもの、地方的なもの的一端を描き出したい。そのために、「地点比較」という視点を明確にしたアプローチ、つまり最初から都市/地方という地点比較を意識した研究を行い、それぞれの特徴を明らかにしたいと考える。

3. 現代社会の諸相

ところで、最近の現代社会に関する分析では、10代ではなく、20～35歳くらいに焦点をあわせた記述が多い。その代表的なものとして、佐藤（2000）、玄田（2001）、山田（1999, 2004）、苅谷（2001）等があげられるだろう。

佐藤（2000）からは、日本社会が「努力すればナント力なる社会」から「努力しても仕方ない社会」へ、そして「努力する気になれない社会」へとむかいつつある姿が見えてくる。佐藤がそこで強く意識しているのは、村上泰亮の「新中間大衆」論である。村上の「新中間大衆」論は、「努力すればナント力なる社会」のその可能性を多くの人が信じていたこと—いわば「可能性としての中流」—を示しているのだが、20世紀の終わりとは歩調をあわせるように、「可能性としての中流」は消滅したと佐藤は主張する。具体的には、SSM（社会階層と社会移動全国調査）データを使って、親の社会的経済的地位が子の地位に再生産される事実を示す。すなわち、ホワイトカラー雇用上層（専門職と管理職の被雇用）になりやすいかどうかは、父親がホワイトカラー雇用上層であるかどうかで決まっていることを実証し、その出身による格差の動向を「新たな階級の出現」、
「知識階級の誕生」と呼んでいる。

佐藤（2000）の他にも橘木（1998）も、所得と資産についてのデータ分析から経済格差が拡大し、不平等化しているという。その一方で、実際には格差の構造は安定しているという専門家もあり⁶⁾、議論の決着はついてない。その中で、玄田は、所得格差よりも仕事格差の方に焦点を合わせ、「（人々が感じている）曖昧な不安の根底にあるのは、所得格差の拡大よりも、仕事格差の拡大である」という。そして、仕事内容の違いが明確にされないまま、負担の大きいものとそうでない人の格差が増大していることを主張する。

そしてそれと関係づけながら、「フリーター」の増大や「ニート」の出現は、若者の働く意欲が低下したからではなく、こだわりをもてる、自分の未来や成長を感じられる、自分に誇りをもてる仕事に出会える機会が、一握りの人々に限定される傾向が強まっているからと説明する。やりがいを感じられる仕事に出会える一部の若者と、そうでない大多数の若者への二重構造化も密かにすすみつつあるというのである。そしてそれを、「意識の中で確実に強まりつつある不平等感」といっている。

意識の中の不公平感については、山田昌弘も問題にしている。山田は以前、「パラサイトシン

グル」という言葉を生んだのだが、それは「学卒後もなお、親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」のことを指している。現在、20～34歳の親同居未婚者は、男女合わせて1,000万人いるといわれ、そのパラサイトシングルは結婚・独立することで生活水準が低下することを好まない。それよりも親に依存し同居生活を続けることで生活水準を維持することを選ぶのである。中流生活を送る親にパラサイトする若者は、自分はまだ中流だという意識（幻想）を持つのであるが、逆にいえば、パラサイトをやめると中流でなくなる危機感があるのである。

その中流ということに注目して山田は、「自分は中流である」という意識と生活実態にずれがない状態は95年頃まで続いたが、97、98年頃からその状態は瓦解した、という。ちょうどそのころ産業構造の転換も始まり、それまで、当たり前だと思っていた中流の生活に手が届かない、親が維持している中流の生活を「自分は維持できない」と思う若者が出現してきたことを指摘する。

そして、山田(1999)の中で、今、起きている現象を「二極化」「リスク化」というキーワードで整理する。前者は、生活水準の格差が広がることを意味する。それは給料が多いか少ないかという「量的格差」とどまらず、正社員を続けられる人と一生フリーターで過ごさざるをえない人といった「立場の格差」「質的格差」につながっている。後者は、「大企業に入れば大丈夫」といった従来は生活の保障になっていたことがリスクを伴ったものに変化することをいう。この場合のリスクは「何かを選択するとき、生起する可能性がある危険」を指している。「二極化」と「リスク化」は互いに絡み合いながら若者の思いをうち砕いていき、現在は、将来に希望を持てる人と、将来に絶望している人に分裂するプロセス、つまり希望格差社会であると山田は主張するのである。

現代社会は、実質的に平等社会か不平等社会かの議論はあるとしても、意識—特に若者の意識—においては、格差を感じる、不平等感をもつ、社会であることは間違いなさそうである。荻谷は、これらのことを社会構造の中での教育の問題としてとらえている(荻谷(2001))。その際のキーワードは、インセンティブディバイド(誘因・意欲の格差拡大)であり、それは、やる気と努力における不平等の拡大と、さらには「降りた者たち」を自己肯定へと誘うメカニズムのことを指した言葉である。

荻谷は、インセンティブ・ディバイドは社会階層によって拡大がすすんでいるという。つまり、階層上位家庭は、インセンティブが見えにくくなくても、その環境ゆえにそれを見抜き意欲を維持している可能性があり、また、上位家庭ほど興味関心をもちやすく、それを学習意欲に結びつける術を知っている可能性があるが、一方で低階層の家庭の子どもは降りることで自己を肯定するということがおきている、ということを指摘している。

佐藤(2000)、玄田(2001)、山田(1999)、荻谷(2001)に描かれていることからすると、現在、ある社会変動が進行中であることは間違いなさそうである。それは、人々は、意識として不平等感や格差感をもつが、さらにそれが階層による教育差によって助長され、結果として、現実的な不平等や格差がひろがっていくということである。

これらは20～35歳くらいを対象とした記述から説明されることが多い。前に述べたが、私たちは、いっぺんに、そして急にその世界にはいるのではない。その前の段階の児童・生徒・学生という時に、その社会像が投げかけられているのである。そこに「社会的存在としての10代」を見ることができるのであるが、それにくわえて筆者の行う「10代研究」では、先の他者との相互作用ともかかわって、10代がどのような社会意識—とくに、「生活意識」、および格差・不平等感のもとにもなる「仕事」にまつわる意識に注目する—を持つようになるのかを明らかにしたい。

4. おわりに

本稿では、「10代研究」において、その求められる視点、取り組むべき課題、を明らかにするために、これまでに行われてきた研究を概観してきた。10代をまとめて見つかった社会学的研究がそもそもほとんどない中、2節では、10代に関わってどういう視点の研究がされてきたのかを、3節ではその10代がいきる、またかれらにとって将来像を描く元になる現代社会の様相はどういうふうなのかを見てきた。以下に、そのことを通して得られた研究の視点を箇条書きで示すことにする。

- ①10代を時間的連続性の中でとらえる。
- ②現代の10代が実際に持つ自己-他者関係はどのようになっているのかを、具体的にとらえる。と同時に、他者との相互作用の果たす役割・意味をとらえる。
- ③都市/地方という地点比較研究を行い、10代を対象として、「都市的なもの」「地方的なもの」のそれぞれの特徴を明らかにする。
- ④「社会的存在としての10代」は、上で述べた他者との相互作用ともかかわって社会化の結果として、どのような社会意識-とくに「生活意識」と「仕事・職業に関する意識」-を持つのかを明らかにする。

これらは、ふたつのことに大きく、くることができよう。②と④は（都市と地方の違いを背景にした）「10代の社会化」についてのことであり、①と③は（都市と地方の違いを背景にした）「ライフコースとしての10代」についてのことになろう。これらは、当然のことながら、重なり合い関係しあっているのだが、両者とも、これまであまり研究されてこなかったものといえるようである。

ところで、社会化研究においては、そこで多くあつかわれるのは、幼児期からの親による社会化とそれに続く小学校低学年における先生や友だちによる社会化、そして学校卒業後の職業的な社会化である。その2者の間にあたる10代の社会化は、社会化研究の中ではあまりあつかわれてこなかった。井上忠司がいう「一生が社会化の過程」⁷⁾という観点からも、10代というのは、社会化においても見過ごすわけにはいかない期間と思われる。

また、ライフコース研究においては、以前は、幼少年期、青年期、壮年期、高齢期、は区分されても、これは連続的・発達のものではなく、年齢別のカテゴリーにすぎなかった。それが長寿化・高齢化によって人生の時期は大多数の人々が次々と経ていく一連の発達段階になった。そうすると、どうしてもライフコース研究は、中年期・高齢期の人を対象としての研究となりがちになり、若い人たちのライフコース研究は後回しにされてきたきらいがある。が、ここまま手つかずのままにしておいてはいけないうらう。

このようなことから、「10代の社会化」「ライフコースとしての10代」を手がかりにしながら、これまであまり関心を示されてこなかった「10代の社会学的研究」について、これからその実証的研究を進めていきたいと考える。

注

- 1) ショート・ライフヒストリーとは、通常のライフヒストリー研究にくらべるとはるかに短い期間の個々人の変遷を追う研究、およびその方法を指して、吉川徹が使った言葉である（吉川2001）。
- 2) くわしくは土井（2003）を参照してほしい。
- 3) 宮台1996：205

- 4) 心理主義化とは「心理学や精神医学の知識や技法が多くの人に受け入れられることによって、社会から個人の内面へと人々の関心が移行する傾向、社会的現象を社会からではなく個々人の性格や内面から理解しようとする傾向、および、『共感』や相手の『きもち』あるいは『自己実現』を重要視する傾向」(森2000:9)をいう。
- 5) たとえば小田(1997)、三浦(1999)など。
- 6) 大竹(2000)太田編(1999)、原・盛山(1999)など。
- 7) 井上1988:118.

文 献

- 安藤由美, 『現代社会におけるライフコース』日本放送出版協会, 2003
- Buhler. C. "The General Structure of the Human Life Cycle," in C. Buhler and F. Massariki, eds., *The Course of Human Life* (Springer), 1968
- 土井隆義, 『〈非行少年〉の消滅』信山社, 2003
- , 『「個性」を煽られる子どもたち』岩波書店(岩波ブックレット), 2004
- Elder Jr. G. H, *Children of the Great Depression* (University of Chicago Press), 1974 (本田時雄他訳, 『大恐慌の子どもたち』明石書店, 1986)
- Erikson. E, *Childhood and Society* (Norton), 1950 (仁科弥生訳, 『幼児期と社会』1・2, みすず書房1974)
- 藤村正之「みんなぼっちの世界」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣, 1999
- 玄田有史, 『仕事の中の曖昧な不安』中央公論新社, 2001
- 原純輔・盛山和夫, 『社会階層』東京大学出版会, 1999
- 樋田大二郎他編, 『高校生文化と進路形成』, 学事出版, 2000
- 井上忠司, 『「家庭」という風景』日本放送出版協会(NHKブックス), 1988
- 荻谷剛彦, 『階層化日本と教育危機』有信堂, 2001
- 香山リカ, 『「こころの時代」解体新書』創出版, 2000
- , 『生きづらい私たち』講談社(講談社現代新書), 2004
- 吉川徹, 『学歴社会のローカルトラック』世界思想社, 2001
- 工藤保則, 『「女性の20代」研究序説』『仁愛大学研究紀要』(3), 2005
- Levinson. D. J, *The Seasons of a Man's Life* (Alfred Knopf), 1978 (南博訳, 『人生の四季』講談社, 1980)
- 三浦展, 『「家族」と「幸福」の戦後史』講談社(講談社現代新書), 1999
- 宮台真司, 「郊外化と近代の成熟」井上俊他編『現代社会学10 セクシャリティの社会学』岩波書店, 1996
- 森真一, 『自己コントロールの檻』講談社(講談社選書メチエ), 2000
- 小田光雄, 『「郊外」の誕生と死』青弓社, 1997
- 尾嶋史章編, 『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房, 2001
- 岡田朋之・松田美佐編, 『ケータイ学入門』有斐閣, 2002
- 大平健, 『顔をなくした女』岩波書店, 1997
- 太田清編, 『データで読む生活の豊かさ』東洋経済新報社, 1999
- 大竹文雄, 「90年代の所得格差」『日本労働研究雑誌』, 2000
- Piaget. Jean, "Piaget Theory," in P. Mussen, ed., *Carmichael's Manual of Psychology*, Vol.1,3 ed (Wiley), 1970
- 佐藤俊樹, 『不平等社会日本』中央公論新社(中公新書), 2000
- 富田英典・藤村正之編, 『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣, 1999
- 山田昌弘, 『パラサイトシングルの時代』筑摩書房(ちくま書房), 1999
- , 『希望格差社会』筑摩書房, 2004

付記 本稿は、「平成17年度仁愛大学共同研究」の研究成果の一部である。